目　次

1　はじめのうた
2　季節のカード（行事編）
3　俳　　句　　夏目漱石　　小林一茶　　正岡子規
4　あそびうた　　そくおんこぞう
5　早口ことば　　「肺呼吸、皮膚呼吸、えら呼吸」
6　かぞえうた　　１着　１基　１具　　（コート、灯籠、はかま）
7　今月の詩　　素朴な琴　八木重吉
8　た し 算　　７の段
9　ことわざ　　魚心あれば水心　　かえるの面に水
　　火中の栗を拾う　　亀の甲より年の功
10　か け 算　　８の段
11　なぞなぞ
12　手あそびうた　お寺の和尚さん
13　今月のうた　　北極と南極
14　四字熟語　　一進一退　　感慨無量　　奇奇怪怪
15　おはなし　　かぐや姫
16　童　　謡　　月
17　イメージトレーニング　　森のお友だち（第７話　探検その４）
　　（イメージしてみましょう）
18　漢　　詩　　秋夜　丘二十二員外に寄す
19　百人一首　　源兼昌　恵慶法師　藤原清輔朝臣　西行法師
20　復習コーナー
21　暗　　示　　（静かなところで目を閉じて聞きましょう）

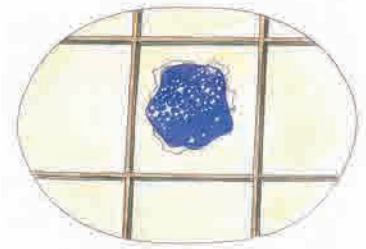
俳　句

肩に来て　人なつかしや　赤とんぼ

夏目漱石

うつくしや　障子の穴の　天の川

小林一茶



首あげて　折り折り見るや　庭の萩

正岡子規

《そくおんこぞう》

そくおんこぞうは　ちいさな「つ」
ちいさな「つ」で　へんしんさせちゃうぞ
「ねこ」に　そくおんこぞうが　いたずらすると
あれあれ　へんしん　「ねっこ」　になっちゃった
「ばく」に　いたずら　「ばっく」に　へんしん
「まと」に　いたずら　「まっと」に　へんしん
「まち」に　いたずら　「まっち」に　へんしん
そくおんこぞうは　いろんなものを　へんしんさせる

今月の詩

素朴な琴

八木重吉

この明るさのなかへ

ひとつの素朴な琴をおけば

秋の美しさに耐えかね

琴はしずかに鳴りいだすだろう

魚心あれば水心

相手が好意を示してくれれば、こちらもそれに応じる用意がある。何事も出方しだい。

かえるの面に水

どんな仕打ちにあっても、平気でいるさま。

火中の栗を拾う

他人の利益のために危険なことをして、自分に災いが降り掛かるようなことをすること。

亀の甲より年の功

長年の経験を尊重すべきことのたとえ。

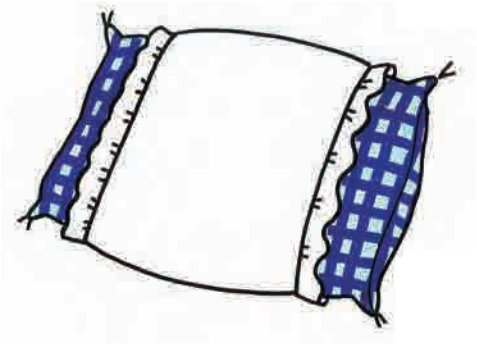
なぞなぞ

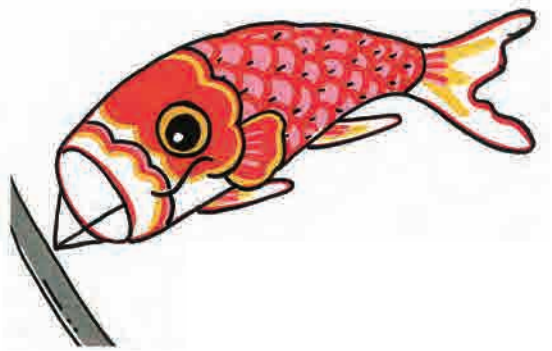
1　かなづちでたたかれて、役(やく)に立(た)つものなあに？

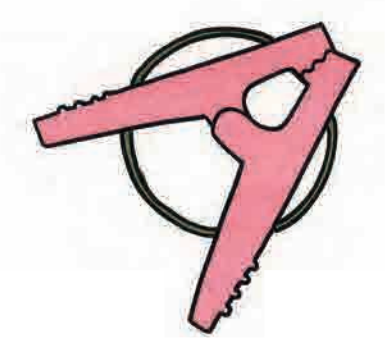
2　寝(ね)るとき、頭(あたま)の下(した)じきになるものなあに？

3　こいはこいでも、空(そら)をおよいでいるこいはなあに？

4　風(かぜ)にとばされないように、洗濯物(せんたくもの)を一生懸命(いっしょうけんめい)おさえているものなあに？







《お寺の和尚さん》

① せっせせの

むかいあって手をつなぎ
上下にゆらす

② よいよいよい

こうさしてゆらす

③ お

手をたたく

④ て

みぎ手とみぎ手を
あわせる

⑤ ら

手をたたく

⑥ の

ひだり手とひだり手を
あわせる

⑦ おしょうさんが
かぼちゃの
たねを まきまし

③〜⑥ をくりかえす

⑧ た

りょう手をあわせる

⑨ めがでて

りょう手をあわせる

⑩ ふくらんで

手をふくらませる

⑪ はながさいたら

手くびをつけたまま
手をぱっとひろげる

⑫ じゃんけん

グーにした手を
ぐるぐるまわす

⑬ ぽん

じゃんけんする

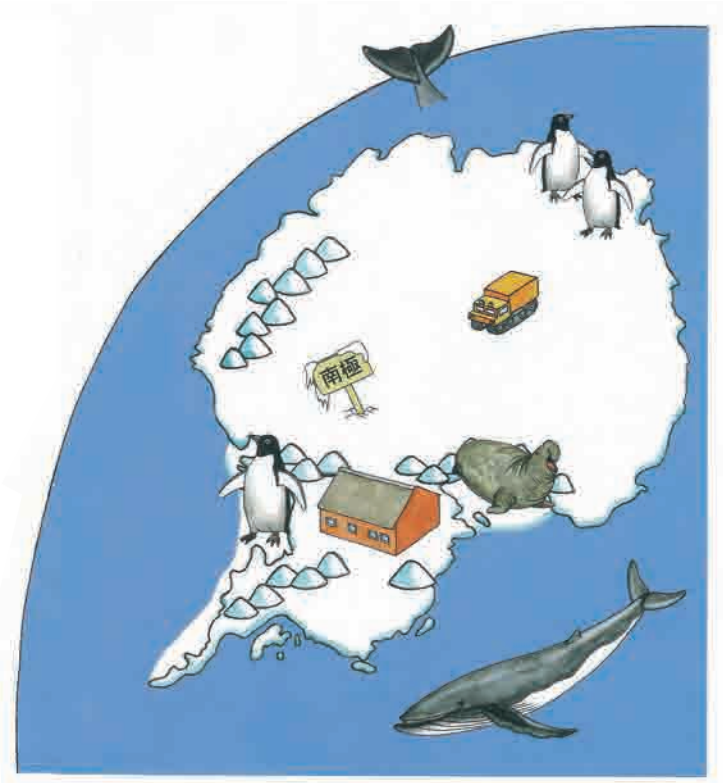
今月のうた

《北極と南極》

北極は　まわりが陸に　囲まれた　氷と雪の海
南極は　まわりが海で　囲まれた　氷と雪の大陸です

南極大陸の中央は　世界で一番寒い場所
夏は　太陽沈まず　白夜が続く
冬は　反対　太陽が　昇らない　昇らない
真っ暗な日が　続きます

南極は　どの国の　ものでもなく
世界のみんなが　生物や気象　資源など　調べてる



一進一退（いっしんいったい）

良（よ）くなったり悪（わる）くなったり、または進（すす）んだり後戻（あともど）りしたりすること。

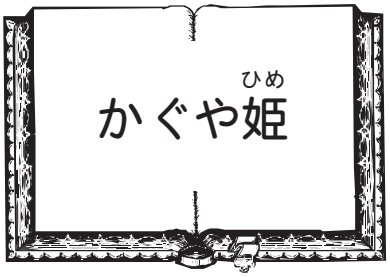
感慨無量（かんがいむりょう）

はかりしれないほど身（み）にしみて感（かん）じること。

奇奇怪怪（ききかいかい）

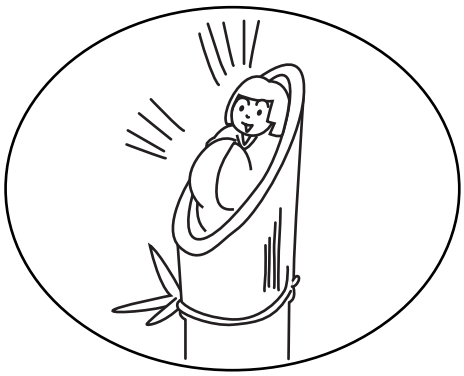
非常（ひじょう）に怪（あや）しく不思議（ふしぎ）なこと。

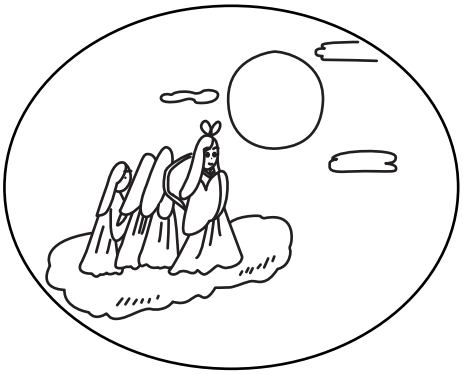
おはなし



「かぐや姫」は、竹から生まれた女の子のお話です。
お話を聞いた後で、質問にこたえてみましょう。

1　おじいさんは、どんな竹を見つけましたか。
2　その竹を切ると、どうでしたか。
3　かぐや姫は、十五夜が近づいて、どうして泣いていたのですか。
4　かぐや姫の話を聞いて、おじいさんは、どうしましたか。
5　かぐや姫は、おじいさん、おばあさんに、最後にどんなことを言いましたか。





秋夜　丘二十二員外に寄す

韋応物

君を懐いて　秋夜に属り
散歩して　涼天に詠ず
山空しくして　松子落つ
幽人応に未だ眠られざるべし

百人一首

淡路島
通ふ千鳥の　鳴く声に
幾夜寝覚めぬ　須磨の関守

（源　兼昌）

八重むぐら
しげれる宿の　寂しきに
人こそ見えね　秋は来にけり

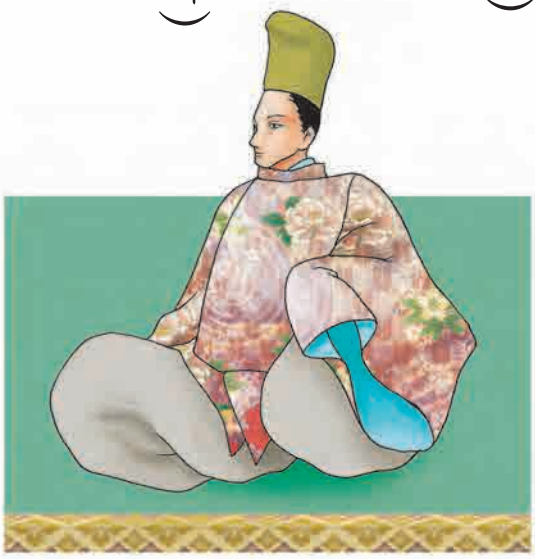
（恵慶法師）

ながらへば
またこのごろや　しのばれむ
憂しと見し世ぞ　今は恋しき

（藤原清輔朝臣）

嘆けとて
月やは物を　思はする
かこち顔なる　わが涙かな

（西行法師）



源　兼昌